

UMI協議会 NEWS

うみ協議会ニュース

日本ブルーフラッグ協会 代表理事 片山清宏さんに聞く
立場の違う人が同じ目標に向かうのがこの認証の核心

湘

南生まれ湘南育ちの私は高校1年生でサーフィンを始め、以来、地元がまさに「自分の庭」のような存在でした。毎日海に通うなかでゴミが気になり始め、自然とサーフィン後に拾うようになったのが環境活動の原点です。特に意識が高かったわけではなく、純粋に「自分の庭をきれいにしたい」という感情からでした。しかし、20年近くビーチクリーンを続けても海岸のゴミはなくなる。それどころか増えていた。なぜだと調べていくうち、ゴミの7～8割は街のゴミが川から流れ込んでいることがわかりました。サーファーひとりくらいがいくら頑張っても根本解決にはならないと痛感し、行政、企業、市民団体が連携できる仕組みづくりが必要だと考え始めました。

そこで100人以上の専門家へのヒアリングや論文調査を重ねた末に出会ったのが、国際環境認証の「ブルーフラッグ」です。直感でこれだと思いました。バラバラに活動している各団体が、「ブルーフラッグ取得」という共通の旗印のもとに連携できると確信したのです。2011年に湘南ビジョン研究所を立ち上げ、「アジア初のブルーフラッグを湘南で」という目標を掲げて認証に関する啓蒙や広報の活動を始めました。

ところが、最初は誰にも相手にしてもらえません。認証機関の国内窓口にまで「日本では無理」と言われ、行政機関10カ所

を訪問しても「前例がない」と否定的。仲間にも「これは無理じゃない？」と笑われました。それでも諦めず、江ノ島沖の海底清掃をメディアに取り上げてもらうなど地道な活動を続け、少しずつ賛同者が現れていきました。そして2016年、5年越しの努力が実り、ついに神奈川県・由比ヶ浜と福井県・若狭和田ビーチがアジア初のブルーフラッグを同時取得しました。水質調査、バリアフリー対応、排水管理など数々のハードルを乗り越えた結果です。特に難しかったのは、漁協、NPO、海の家組合、行政など利害の異なる関係者をまとめる合意形成のプロセスでした。この地道な調整こそがブルーフラッグ推進の核心だと今も感じています。

現在、国内の認証取得地は15カ所まで増えました。環境省の補助金の対象になったり環境大臣賞受賞など、行政からの後押しも少しずつ出てきています。私たちの次の目標は、これを100カ所に広げること。ブルーフラッグを「ツール」として活用しながら、日本中の海辺から持続可能な地域づくりを進めていきたいと考えています。さらに将来は、東南アジアへの展開を視野に入れています。世界の海洋ゴミの大半は東南アジアを経由して流出しており、この問題を解決しない限り世界の海は守れません。フィリピン、タイ、マレーシアなどでブルーフラッグを広め、アジアから海洋環境の改善を進めること。それが私の最終的な夢です。(談)



日本ブルーフラッグ協会 キレイで安全な海の認証を行う

「ブルーフラッグ」認証。日本ではまだ聞きなれない言葉だが、これからの海の環境を語るうえで、大きな意味を持つ国際認証の名称だ。認証取得のためには海に関わるすべての者の合意形成が必要など高いハードルを越える必要があるが、だからこそその意義は深い。将来の海洋環境に大きく影響するこの認証を紹介しよう。

海を愛するすべての人に知ってほしい認証制度がある。デンマークに本部を置く国際NGO、FEE（国際環境教育基金）が運営する「ブルーフラッグ」だ。1985年にフランスで誕生した国際環境認証で、当初は水質管理が中心だったが、廃棄物管理や海岸保護など環境マネジメント全般へと基準が拡充され、2001年にはFEEが国際組織へと発展し、プログラムは世界へ広がっていった。

認証の対象はビーチ、マリナー、観光船舶の3カテゴリー。ビーチは「水質」「環境教育と情報」「環境マネジメント」「安全性・サービス」の4分野33項目、マリナーはCSRと地域コミュニティーへの参画などが加わり6分野37項目の審査を毎年クリアしなければならない。国内審査と国際審査の2段階で行われるこの審査は年々厳しくなるため、一度取得して終わりではなく、継続的な環境改善が必要となるのが特徴だ。

日本におけるブルーフラッグの運営組織は一般社団法人JARTA（京都府）で、認証取得を希望する施設はJARTAに申請し、審査を受ける仕組み。また、取得支援と普及促進を専門とする一般社団法人日本ブルーフラッグ協会がJARTAと連携し、認証を目指す場所・施設のサポートを行っている。

認証取得のメリットは大きい。申請段階で現状のビーチやマリナーが抱える課題が可視化・共有化され、行政、事業者、住民が連携して具体的な改善策に取り組むきっかけとなり、認証取得が叶えば、サステナブルな場所であることを国内外に客観的に示す証になる。これは観光面での効果が大きく、ヨーロッパでは「きれいで安全、誰もが楽しめる優しいビーチ」の象徴として、多くの旅行者がブルーフラッグビーチをバカンスの目的地に選ぶようになっている。

また、ブルーフラッグはSDGsの17のゴールすべてに関わるプログラムとして位置づけられている。特に「目標14：海の豊かさを守ろう」への直接的な貢献はもちろん、水質管理は「目標6：安全な水とトイレを世界中に」、環境教育は「目標4：質の高い教育をみんなに」、持続可能な観光振興は「目標8：働きがいも経済成長も」にも寄与する。海辺という一つの場所での取り組みが、複数のSDGs目標を横断的に推進できる点もブルーフラッグの大きな特徴だ。

海外での認知度に比べ、日本は発展途上にある。現在、世界51カ国・5,195カ所が認証を取得しているのに対し、日本では2016年に神奈川県由比ガ浜海水浴場と福井県の若狭和田



アジア初のブルーフラッグ認証を取得した神奈川県鎌倉市の由比ガ浜。海の家を取りまとめる茶亭協会の理解を得られたことが、認証取得の推進力になった



岩手県陸前高田市の高田松原海水浴場は2024年に認証取得。東日本大震災で途絶えてしまった「海水浴」の文化を取り戻し、美しい海という地域の誇りを次世代に継承するための起爆剤として、認証取得を企図したという(写真提供：陸前高田市)

ビーチがアジア初の認証を取得。しかし2025年時点で15カ所の認証にとどまっているのが現実なのだ。それでも確実に歩みは進んでいる。2022年にはリビエラ逗子マリナーがマリナーとしてアジア初のブルーフラッグを取得し、国内の認証地は年々増加している。日本は四方を海に囲まれ、美しい海岸線を持つ海洋国家だ。ブルーフラッグ認証を広めることは、単なる認証取得にとどまらず、海を守る意識を地域全体で醸成する効果を生む。世界基準の「青い旗」をたなびかせる日本のビーチやマリナーは今後さらに増えていきそうだ。

日本のブルーフラッグ認証ビーチ・マリナー (2025年4月10日時点)

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| ① 由比ガ浜海水浴場 (神奈川県鎌倉市) | ⑨ サンオーレそではま海水浴場 (宮城県南三陸町) |
| ② 若狭和田ビーチ (福井県高浜町) | ⑩ 菖蒲田海水浴場 (宮城県七ヶ浜町) |
| ③ 須磨海水浴場 (兵庫県神戸市) | ⑪ 高田松原海水浴場 (岩手県陸前高田市) |
| ④ 本須賀海水浴場 (千葉県山武市) | ⑫ 二色の浜海水浴場 (大阪府貝塚市) |
| ⑤ 逗子海水浴場 (神奈川県逗子市) | ⑬ リビエラシーボニアマリナー (神奈川県三浦市) |
| ⑥ リビエラ逗子マリナー (神奈川県逗子市) | ⑭ 吉里吉里海岸海水浴場 (岩手県大槌町) |
| ⑦ 興津海水浴場 (千葉県勝浦市) | ⑮ ヤンマーサンセットマリナー (滋賀県守山市) |
| ⑧ 小田の浜海水浴場 (宮城県気仙沼市) | |



(一社)
日本ブルーフラッグ協会

TOPIC

第1回の大賞と各部門賞が堂々と決定

「日本マリン賞2026」表彰

JAPAN
MARINE
AWARD

日本マリン賞

2026年3月20日、「ジャパン インターナショナル ボートショー 2026」パシフィコ横浜会場のメインステージにて、「日本マリン賞2026」の表彰式が行われた。第1回となる今回、栄えある大賞・国土交通大臣賞に海洋冒険家の白石康次郎さんが選ばれたほか、右記の4名の方がオーディエンス賞と各部門賞に選ばれ、それぞれ壇上で賞状を受け取り、マイクを手に謝辞を述べた。

表彰式には、来賓として国土交通省大臣官房技術審議官 今井 新様、海上保安庁交通部安全対策課 永田誠一郎様、日本マリン事業協会専務理事 金子純蔵様が列席。式の冒頭にはゲスト審査員を務めたタレントのIMALUさんとUMI協議会の田久保雅己会長の二人によるトークショーも行われ、会場を訪れた人たちの共感を誘った。また、同日夜には受賞者を交えたパーティーも開催され、参加者同士の交流を深める時間を過ごした。

海とマリンレジャーを愛するすべての人を応援するUMI協議会が今年から新たに発足させた「日本マリン賞」は、これまで24年間にわたりマリンジャーナリスト会議(MJC)が実施してきた「MJCマリン賞」をUMI協議会が継承して実施するもの。マリン業界、マリンレジャーの普及振興を願い、その年のマリン業界に大きく貢献した人物、団体等に贈られる栄誉ある賞だ。

対象は海を舞台とした競技スポーツにとどまらず、海に関するユニークな活動、学術的研究、安全普及、環境保護、ボランティアなど、広範囲に「海洋文化の普及」活動に携わってきた人々すべて。表彰を通じて、広く国民の皆さまに海やマリン文化への理解と関心を高めていただくことを目的としている。

選定方法は、UMI協議会に登録する全27団体(2025年11月現在)からの推薦に加え、各マリンメディアがその年度に取り上げたニュース、記事も参考に

ノミネートを選出。UMI協議会 日本マリン賞選定委員会での協議に加え、インターネットを通じて広く一般からも投票いただき、評価の対象とした。初年度、成功裡に表彰を終えることができたので、この知見を生かし、UMI協議会としては「日本マリン賞2027」の実施に向けて着実に歩みを進めていく所存だ。

日本マリン賞2026

■大賞・国土交通大臣賞／スポーツ部門賞

単独世界一周ヨットレース2度完走した、白石康次郎さん

■スポーツ部門賞／オーディエンス賞

フリーダイビングCWT M1 84mで世界記録を更新した、岡本美鈴さん

■環境・安全・普及部門賞

三陸の子どもたちに海体験と海の知恵を伝える活動を続けている、さんりくBLUE ADVENTURE代表 佐藤奏子さん

■アドベンチャー部門賞

80歳でヨットによる単独太平洋一周を達成した、永井 晃さん

■文化人・タレント部門賞

日本ジュニアヨットクラブ連盟会長としてジュニア育成に尽力した、石原伸晃さん



パシフィコ横浜のボートショー会場で行われた「日本マリン賞2026」表彰式



「日本マリン賞2026」
のサイト

UMI協議会 会長コメント

「日本マリン賞」に期待すること

UMI協議会が主催する「日本マリン賞」の創設にあたり、会員および事務局の皆さまのご協力により、選考作業から表彰式、受賞パーティーまで無事終了いたしましたこと、心より御礼申し上げます。前ページと下記に記載の通り、第1回は5名の方に各賞を贈呈させていただきました。

私は、毎年開催されている「植村直己冒険賞」において、海の分野の代表とし

て、推薦委員会の委員を初回から30年にわたり務めてまいりました。山(登山など)、空(気球ほか)、陸(徒歩、バイク、犬ぞり、リヤカーほか)の専門家とともに、国内外で実施された100件を超える冒険の中から3～4件に絞り込む作業に携わっておりますが、ノミネート一覧を目にすることを毎年大きな楽しみとしております。

リヤカーひとつで世界を巡る人、ひた

すら地球上を歩き続ける人、宇宙に近い冬の北壁に挑む人、極地を犬ぞりで駆ける人——。「人間って、すごい」と、毎回心を動かされます。

日本マリン賞は、海をフィールドとする活動を対象としています。それぞれの立場で海に夢を抱き、不可能を可能にし、新たな分野を切り開く。地道に普及の輪を広げる人、団体など、多様な取り組みが生まれていくことでしょう。さて、2026年にはどのような活動が展開されるのか、今から来年の表彰が楽しみでなりません。

本賞を通じて受賞者の功績が広く共有され、それに触れた方々の中に新たな勇気と知恵が生まれ、海洋レジャーの健全な普及と発展につながっていくことを、心より期待しております。

UMI協議会 会長
田久保雅己



大賞・国土交通大臣賞／スポーツ部門賞
白石康次郎さん



環境・安全・普及部門賞 さんりくBLUE
ADVENTURE代表 佐藤奏子さん



スポーツ部門賞／オーディエンス賞 岡本
美鈴さん



アドベンチャー部門賞 永井 晃さん



文化人・タレント部門賞 石原伸晃さん

UMI協議会 登録団体

■活動会員：海の駅ネットワーク、(一社)海洋連盟、(一財)日本海洋レジャー安全・振興協会、日本小型船舶検査機構、(一社)日本サーフィン連盟、(一社)日本スタンドアップパドルボード協会、(一社)日本セーフティパドルリング協会、(公財)日本セーリング連盟、NPO法人 日本中古艇協会、(一社)日本ブルーフラッグ協会、(一社)日本マリーナ・ビーチ協会、(一社)日本マリン事業協会、(公財)日本ライフセービング協会、NPO法人 パーソナルウォータークラフト安全協会、NPO法人 マリンプレイス東京、(公財)マリンスポーツ財団

■賛助会員：(株)オージーディー、(株)舵社、(株)GK京都、(株)電通東日本 静岡支社、(株)トオル・スタジオ、(株)ナビ、(株)ネオリンク、(株)ボーディングクリエイト、(株)MILLIOT、ヤマハ発動機(株)、(株)ワイズ

UMI協議会NEWS

No.3 2026.4
2026年4月●日 発行

UMI協議会 事務局
(一財)日本海洋レジャー安全・振興協会
〒231-0005 神奈川県横浜市中区本町4-43 A-PLACE馬車道9階
TEL.045-228-3061

